

物語研究の方法を顧みる

伊藤 守幸

1 はじめに

停年を控える身として、紀要への投稿はこれが最後となるかもしれないので、この機会にこれまでの研究歴について概観してみたい。

この種の文章を書き起こすに当たって思い合わされるのは、森鷗外の「なかじきり」(「斯論」1917(大正6)年9月)という文章のことである。「なかじきり」は、晩年の鷗外が文筆に関わる仕事に区切りを画すために記した文章であり、停年を前にした人間が思い浮かべるのにふさわしい文章と言えそうだが、私が初めてこの文章を読んだのは、今から半世紀以上も前のことである。学部時代の4年間は手当たり次第の濫読のうちに過ぎたというのが、学生生活の実態だったように思うが、鷗外の主要な作品については大学入学後の数カ月の間に集中的に読破しており、小文の「なかじきり」は、繰り返し読むうちに冒頭部を暗記したことを覚えている。それは、以下のような文章だった。

老は漸く身に迫って来る。

前途に希望の光が薄らぐと共に、自ら背後の影を顧みるは人の常情である。人は老いてレトロスペクティブの境界に入る。

10代の青年が、老境を迎えた鷗外の感懐を、どこまで深く感じ取ることができたかは定かでないが、鷗外が作中でしばしば言及する「諦念」の意味については、作品の読解を通じてそれなりに理解を深めていたので、当時は、「なかじきり」をいかにも鷗外らしい文章として読み返していたのである。ただし、その一方で、「なかじきり」に関しては、自分は晩年に至ってもこのような文章を書くことはあるまいと思っていたのも確かである。そんな風に考えたのは、鷗外からの影響というよりも、『森鷗外』(三笠書房、1941年)の著者石川淳の文学観に影響された面が大きかったはずだが、当時の私は、文筆に関わる仕事の本分は「書くこと」によって前途の闇を切り開くことにあり、そのような仕事を続ける限り、自分は「自ら背後の影を顧みる」類の文章を書くことはない(書くべきではない)と、強く思い定めていたのである。

さて、そんな青年期の思いとは裏腹に、この文章の書き出しは、すでにして回顧的姿勢を示しているのではないかと問われれば反論の余地もないが、このような仕儀に至ったには、それなりの理由がある。その理由とは、まったく個人的で偶発的な出来事ではあるが、以前紀要に発表した2編の文章¹でも報告した通り、2015年に脳出血に起因する失語症を発症したことが、それである。失語症の主症状が失読症だったため、一時的に識字能力を完全に喪失し、リハビリテーションの数カ月を経て、失われた言語（文字）を再び取り戻すという経験をしたのだが、この病気の前後で、生き方が大きく変わることになったのである。「老は漸く身に迫って来る」という「なかじきり」の冒頭文の意味するところを、失語症の経験によって初めて身をもって知ることになったのである。

私の経験した完全な失読状態は、「文字が読めない状態」であることは間違いないが、患者の実感としては、文字が読めない理由は、読む能力が失われたからというよりも、この世から一切の文字が消失したため、「存在しないものは認識できない」という当たり前の事態に直面し、困惑させられたという感じだった。ただし、突然この世界から文字が消えてしまったのだから、その困惑は大きく、たとえば書物を繙いてもそこに文字が認められないわけだから、文学研究者にとって、これが致命的状況なのは明らかであり、自身の生き方を根本的に考え直す必要に迫られたのである。

そして、生き方の根本的問い直しは、発症から8年が過ぎた今も続いているというのが、現状である。失語症のような高次脳機能障害の厄介なところは、「治癒」という概念が曖昧な点である。発症後3カ月を過ぎた頃に、リハビリの卒業試験のようなIQテストが実施されたが、その採点を終えた言語・聴覚療法士は、「言語療法士としては、これ以上お手伝いできることはありません」と言って、一連のリハビリの終了を告げながら、「失語症の場合、治療の最終的な目標地点をどこに定めるかということは、患者によって異なります」「今回のテストの成績を見れば、高い言語運用能力を回復しており、日常生活に支障はないと思われるので、言語・聴覚療法士としては、リハビリの目標は達成されたと判断しますが、日本文学研究者である患者がどのレベルの言語能力を最終目標として設定するか（リハビリに何を求めるか）という話になれば、当然別の考え方もあるでしょう」と補足したのである。

これは、もっともな話だった。高次脳機能障害の治療プロセスにおいては、体調の変化を注意深く観察しながら専門医と相談した上で様々な判断を下すことになるが、結局のところ脳内の微妙な変化を感知できるのは患者本人だけなので、本人の判断が重要な意味を持つのである。私の場合、話すことと聴くことに深刻な問題は発生していないので、たとえば教壇復帰の時期を決めるのに迷うことはなかったが、逆に、読むことと書

¹ 「失語症に関する内的記録—文学者が文字を失ったとき—」、『学習院女子大学紀要』第18号、pp.1-9、2016年3月。
「失語症からの回復過程に関する考察」、『学習院女子大学紀要』第20号、pp.1-13、2018年3月。

くことには色々と問題があったため、学術論文の執筆依頼が届いた時には、その依頼を引き受けるか否かという判断をひとりで下すことはできず、主治医に助言を求めたのである。その際、主治医の最初の反応は否定的なものだった。脳出血を発症した患者の予後を見守る脳神経外科医としては、脳内血流量を著しく増加させかねない仕事を勧められないのは当然である。ただし、この相談の際には、依頼原稿のテーマが興味深かったことと、この仕事をリハビリの最終段階と位置付けることもできるのではないかという思いもあって、「同時に複数の仕事を引き受けない」、「体調に留意し、不調を感じたら中止する」という条件付で執筆許可を得たのである。結果的に、依頼された20000字余りの論文を締切り前に書き終えることができたが、そのために要した時間とエネルギーは、発病前とは比較にならない大きなものだった。何より執筆期間が半年に及んだため、長期間にわたって血圧の高い状態が続くことになったのが、対応に窮する事態だった。こうした一連の経緯を経て、病気再発の不安を抱えながら論文の執筆を続けることには無理があるというのが当面の結論となり、それ以降は、同様の執筆依頼は原則的に断っている（ちなみに「なかじきり」も、森鷗外が執筆依頼を謝絶するために記した文章である）。

では、論文の執筆を中止して今は何をしているかということ、同じ作文でも学術論文より脳への負担の少ない書き物はあるので、たとえば学術的エッセイの執筆や英語論文の翻訳といった仕事は、依頼があれば引き受けているが、今年（2023年）主に取り組んでいるのは、これまで学会誌等に発表してきた物語研究に関する論文を書籍としてまとめる仕事である。その仕事は、現在、全15章の論文集（他に翻訳とエッセイを含む）として形を成しつつあり、この本の内容は、半世紀近い研究歴を反映したものとなっているので、以下、その内容紹介を通じて、自身の研究歴を辿り直してみたい。

これまでの私の研究は、日記文学と物語文学の間を往還するような軌跡を辿っている。後述するように、日記文学についてはすでに3冊の著書を公刊しているが、このたび物語文学に関する論文集をまとめることによって、研究歴を総体として見渡すことができたのである。

2 論文集の編集をめぐって

上記のように、以下に紹介するのは、これまで重ねてきた平安文学研究の中から、物語文学に関する考察を中心にまとめた論文集である。これまで私は、『更級日記』に関する2冊の論文集²と、それらの著書の内容を長文の解説に反映させた英訳『更級日記』³

² 『更級日記研究』（新典社、1995年）。『更級日記の遠近法』（新典社、2014年）。

³ *The Sarashina Diary: A Woman's Life in Eleventh-Century Japan*

Translated, with an introduction, by Sonja Arntzen and Moriyuki Itō, Columbia University Press, 2014

を公刊している。そのように、これまでの研究歴の中心に、日記文学研究が位置付けられるのは確かだが、その一方で、物語に関する論文も随時発表しており、日記研究も物語研究も、研究歴の長さには大きな違いはない。ただし、重ねてきた「時間」は同様でも、その「質」には相応の違いがある。しかるべき節目毎に、著書という形で成果をまとめてきた『更級日記』研究の場合、個別の論文の執筆動機や掲載誌は異なっても研究対象の一貫性は保たれており、論文集をまとめる際に、編集時点の視座から一書を統括することにも、特に困難を感じることはなかったのである。

それに対して、現在作成中の物語論集の場合、『更級日記』を集中的に論じた前2著と違って、平安時代の物語を主な研究対象としながらも、時には時代の枠組を超えて、より多様な作品に考察の幅を広げており、しかも、それらの論文は、元々一書にまとめることを前提に書かれていないため、研究方法の面でも特に統一性を意識することはなかったのである。したがって、この論文集においては、編集時の視座からなされる加筆に関して、前2著に比べて慎重に対処している。とりわけ『浜松中納言物語』について考察した初期論文の場合、それらの論文が、1970年代～80年代の学界状況を今日に伝える文章として一定の歴史的価値を有する点にも配慮して、加筆は最小限にとどめている。これは、初期論文の多くが現在は入手困難である点を考慮した上での判断でもある。

上記の点を意識しつつまとめられた論文集は、物語の構造分析に注力した初期論考から、幅広い文化史的視座に立って考察を展開した近年の研究に至るまで、視点の異なる多様な論文の集合体となっている。そうした論文集のありようは、10世紀初頭に誕生した仮名物語が、その後の200年の間に爆発的と言ってよいほどの多様で急速な発展を遂げた、日本文学史の特殊なありようとも響き合っているのである。

なお、従来の研究書では、物語文学の史的展開を問題にすると、「変遷」、「影響」、「受容」といった用語が、しばしば使われており、それは書物の題名としても用いられているのだが、本論文集の題名を考える際には、候補からはずさされている。それらの用語に伴う「連続性」のイメージを避けたかったからである。

言語芸術としての物語は、当然のことながら読まれることによって後世に影響を与えて行く。たとえば『源氏物語』とその亜流的物語の関係ならば、読書行為を媒介とした作品間の直接的影響関係は見えやすいし、現に「影響」や「受容」という用語は、『源氏物語』研究においては頻繁に用いられている。しかし、この論文集が主に取り上げるのは、『うつほ物語』と『浜松中納言物語』である。『うつほ物語』は最古の長編物語として、後世への影響の明らかな作品である（『源氏物語』も『うつほ物語』に言及している）。しかし、『源氏物語』とその後との物語の関係とは違って、『うつほ物語』と他作品の影響関係を具体的に論じることには困難が伴う。作品の構想や構成、更には表現様式の面でも、『うつほ物語』は、比類を絶する破格の作品として文学史上に位置付けられる物語であるからだ。その辺の事情については、論文集の第1章と第2章で詳しく論じ

ている。

一方、『浜松中納言物語』（以下、適宜『浜松』と略す）は、後世の作家に類似作品を書かせるほどの大きな影響力を発揮しているが、『浜松』に影響された作家というのが藤原定家（1162～1241）と三島由紀夫（1925～1970）なのだから、このふたりが『浜松』から受けた影響については具体的に論じることができるとしても、それは歴史上の特異点を観測するようなものであり、『浜松』成立後の100年余りにわたって、この物語の受容史に空白が存在することを勘案しても、藤原定家や三島由紀夫と『浜松』の関係を掘り下げて追尋したところで、そこから文学史の流れを連続的なものとして描き出すのは困難である。

そんな次第で、物語文学史を俯瞰しつつ、『うつほ物語』や『浜松中納言物語』を中心に考察を進める論文集の題名としては、連続的变化を連想させる用語よりも、「跳躍」や「断続性」を含意する用語の方がふさわしいと判断し、『遷移する物語』という題名を選択したのである。ちなみに、三島由紀夫が『豊饒の海』の創作に当たって『浜松中納言物語』から受け継いだのが、輪廻転生という特殊なモチーフであったことから、この題名には、「(現代小説に) 転生する物語」という含意もこめられている。

以下、論文集の構成と概要を簡潔に説明したいと思うが、まずは論文集の目次を示しておく。なお、目次にあわせて初出誌に関する情報も示すが、論文集をまとめる段階で、初出論文に対しては表現の統一性や先行研究に配慮した加筆がなされており、題名の微妙な変更も含めて、初出論文と論文集の間にはわずかな差異が存在する（内容的変更はない）。また、論文集は縦書で編集されているので、目次にも漢数字を用いているが、本稿では算用数字に変更している。

『遷移する物語』 目次

序章—本書の構成と概要—

第1部 平安時代物語の諸相

I 『うつほ物語』 逍遙遊

第1章 『うつほ物語』 と和漢交流の文学史

（初出誌:『国語と国文学』88巻11号、2011年11月）

第2章 瑠璃に荘厳された世界—文化史的視座から見た『うつほ物語』—

（初出誌:『うつほ物語大事典』勉誠出版、2013年4月）

II 『浜松中納言物語』の描いたもの

- 第3章 『浜松中納言物語』における夢と現実
(初出誌:『文芸研究』第91集、1979年6月)
- 第4章 『浜松中納言物語』と『豊饒の海』—輪廻転生思想と文学—
(初出誌:『文芸研究』第93集、1981年1月)
- 第5章 『浜松中納言物語』の反中心性
(初出誌:『文芸研究』第97集、1981年5月)
- 第6章 輪廻の纏れた糸—『浜松中納言物語』の構想論をめぐって—
(初出誌:『仙台電波工業高等専門学校 研究紀要』第11号、1981年12月)
- 第7章 『浜松中納言物語』と『更級日記』の交錯する旅路
(初出誌:『平安後期物語』翰林書房、2012年3月)

III 子供の領分

- 第8章 『貝あはせ』試論
(初出誌:『弘前大学国語国文学』第8号、1986年3月)
- 第9章 平安文学における子供の諸相
(初出誌:『弘前大学人文学部 文経論叢』21巻3号、1986年3月)
- [エッセイ] 子供へのまなざし・子供からのまなざし (映画批評『ミツバチのささやき』)
(初出誌:『詩論』8号、1985年12月)

第2部 俯瞰的視座から読む日本古典文学

IV 平安文学と天変地異

- 第10章 平安文学に描かれた天変地異—「末の松山」と貞観の大津波—
(初出誌:『東日本大震災 復興を期して—一知の交響』東京書籍、2012年8月)
- 第11章 平安文学と震災の記憶をめぐるエスキス
(初出誌:『天変地異と源氏物語』翰林書房、2013年6月)

V 『更級日記』を外部視点から読み直す

- 第12章 含意を翻訳に活かすために—『更級日記』の英訳をめぐって—
(初出誌:『レポート笠間』59号、2015年11月)

第13章 『更級日記』における東国の意味 ―作品の語らなかつたこと―

(初出誌:『更級日記上洛の記千年―東国からの視座』武蔵野書院、2020年7月)

[翻訳] “The Sarashina Diary”への批評に関する考察

(ソーニャ・アンツェン著、伊藤守幸訳)

(初出誌:『グローバル・ヒストリーと世界文学』勉誠出版、2018年4月)

VI 現代小説に描かれた「荒魂」と「みやび」

第14章 石川淳における「野生」の意味―柳田国男との影響関係を通して―

(初出誌:『日本文芸論稿』第9号、1979年6月)

第15章 優雅の変質―『春の雪』への一視点―

(初出誌:『弘前大学国語国文学』第11号、1989年3月)

あとがき

索引

英語目次と英語要旨

3 論文集の概要と物語研究の方法

目次に示したように、この論文集は、「第1部 平安時代物語の諸相」、「第2部 俯瞰的視座から読む日本古典文学」という2部構成にまとめられている。

第1部で取り上げるのは、『うつほ物語』と『浜松中納言物語』、更には平安時代の物語や日記に描かれた子供像の問題である。

まず第1章と第2章では、『うつほ物語』について考察する。『うつほ物語』は、量的長さという点で『源氏物語』に比肩し得る大部の物語であるが、単に大冊の物語というのみならず、作品の内包する時間・空間のスケールの大きさが特徴的な作品である。とりわけ空間的広がりに関しては、『源氏物語』を遥かに凌ぐ巨大なスケールの作品と言える。作品冒頭に主人公の異国遍歴譚を配置しているのが『うつほ物語』の特徴であり、しかも唐土を目指した主人公が漂流の果てに波斯国（ペルシア）に漂着するという場面展開の仕方は、当時の読者の想像力の限界を遥かに超えていたと思われる。第1章では、そんな世界を創造するに当たって、作者が言語的コミュニケーションをどのように描いているかという問題を取り上げ、東アジア漢字文化圏の国際交流の実態を反映するようにして、波斯国における主人公の言動が造形されていることを明らかにした。第2章では、『うつほ物語』に類出する「瑠璃」について考察した。元々平安時代の物語に瑠璃の用例は少ない上に、そのほとんどがガラス器を指している。そんな中で、唯一『うつほ物語』には鉱物としての瑠璃が類出するのである。鉱物としての瑠璃とはラピス

ラズリである。『うつほ物語』の異国遍歴譚の中では、インドの高山地帯（ヒマラヤを連想させる記述が作中に登場する）の周辺で主人公がラピスラズリの露頭を目にする場面が描かれているが、古代世界でラピスラズリ鉱床の存在が確認されているのは、アフガニスタン・バダフシャン地方の高山の山頂付近に位置する鉱山だけである。古代メソポタミアや古代エジプトの王侯の身边を飾った装飾品も正倉院の収蔵品も、近代以前のラピスラズリはすべてアフガニスタンに由来するのだ。古代世界は、シルクロードの遙か以前からラピスラズリルートによって結ばれていたのである。『うつほ物語』の作者がラピスラズリの産地や交易ルートについてどの程度の知識を有していたかは知る由もないが、『うつほ物語』には、すべてを知る作者が地球を俯瞰しながら書き進めているようにさえ見える世界が描かれているのだ。たとえば、この物語には、海外交易によって巨万の富を築いた人物が、紀伊半島（吹上の浜）に豪壮な邸宅を建てる場面が登場するが、異国趣味に満ちたその邸宅には、床材としてラピスラズリが敷き詰められているのだ。すなわち、『うつほ物語』には、ラピスラズリの産地と消費地の様子がともに描かれているのだが、これはただの偶然だろうか。この章は、博覧強記の作者が優れた想像力を駆使したとき、時代や常識を超えた途方もない物語世界が創造されることを、考古学や歴史学の成果を援用しながら読み解いたものである。

第3章～第7章では、『浜松中納言物語』を論じている。ここでは現実を夢にたとえる表現の類出の問題（第3章）や、都に背を向ける作品構造と栄達に興味を示さない人物造形の問題（第5章）、輪廻転生の動因となる「業」の複雑な作用と作品終結部の構想の不現実性（第6章）といった問題が、分析的読解を通じて探求されている。更に第4章と第7章では、他作品との比較考察が行われる。『浜松中納言物語』と『豊饒の海』を比較した第4章では、仏教の輪廻転生思想の理論的側面に関する三島由紀夫の理解の仕方を詳しく紹介し、『浜松中納言物語』との相違点や共通性を明らかにしている。第7章では作品の舞台として選ばれた唐土の造形方法をめぐって、『更級日記』との関係が検証される。とりわけ杭州から長安を目指す中納言一行の旅の描き方が、『更級日記』の東海道上洛の記の描写と近似していることに着目し、和製漢詩の世界で京都周辺の風景を唐土の名所と重ねるように描く「見立て」の方法が用いられるのを逆手にとるようにして、唐土の造形に日本の風景を利用する方法が用いられていることを明らかにした。

第8章、第9章では、平安文学に描かれた子供像について考察した。まず第8章では短編物語集『堤中納言物語』所収の『貝あはせ』を取り上げて、分析的読解を試みた。この物語は、若き貴公子が、通りすがりの屋敷の様子を垣間見るといふ、典型的な「色好み」の世界として書き起こされるのだが、最終的には大勢の子供たちが駆け回る騒然とした世界に逢着して終幕を迎えている。この章では、『貝あはせ』の世界が、色好みの物語から童心の物語に変容する過程を詳しく分析した。邸内の少女の容姿や年齢も問題になるが、垣間見を続ける男の心に生じた微妙な変化を具体的に明らかにしたのが本論の眼

目である。続く第9章では、より多くの物語や日記を対象として、そこに描かれた子供像を分析し、平安貴族の世界において、子供とは如何なる存在であったのかという点を考察した。なお、この論の冒頭では、近代フランスの子供像に関するフィリップ・アリエスの研究（『<子供>の誕生: アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房、1980年）を援用している。

続いて第2部「俯瞰的視座から読む日本古典文学」では、タイトル通り、日本古典文学を外部の視座から捉え直した論考をまとめている。

第10章と第11章では、東日本大震災という偶然的要因を契機として、『古今和歌集』に対する見方を改めることになった経緯が論じられている。具体的には「末の松山」を詠んだ和歌が問題となるが、学生時代に歌枕「末の松山」を実見したことがあり、長い間、その松の位置から類推して、そこを波が越すことはないと思い込んでいた筆者が、東日本大震災の大津波によって「末の松山」の松の根方が波に洗われるのを目にしたことによって、和歌の解釈を改めることになった経緯が具体的に論じられている。更には、ひらがなが普及したばかりの時期に、『古今和歌集』のようなきわめて完成度の高い、揺るぎない美の世界が突然出現したことについても、9世紀の日本列島が相次いで天変地異に襲われたこと、『古今和歌集』が一連の大震災の直後に編纂されたことを勘案することによって、新たな理解が得られたのである。

第12章と第13章では、『更級日記』を取り上げた。第12章では、カナダ人研究者と共同で行った『更級日記』の英訳作業において痛感した問題を取り上げた。それは、含意を翻訳に反映することの難しさという問題である。具体的には「むらさきのゆかり」という語句の翻訳の経緯を取り上げて、日本語と同様の含意を有する英語を見つけることの難しさと、不必要な英語の含意を避けることの難しさという両面から、この問題を論じている。第13章では、『更級日記』の冒頭部が東国からの旅立ちを描いて作品を始動させていることの意味や、作品に描かれなかった東国生活はどのようなものであったかといった事柄を、具体的で詳細な描写に満ちた東海道上洛の記と東国生活の空白を対比することによって論じている。

最後に、第14章と第15章では、現代小説と古典との関係を取り上げている。第14章では、石川淳の長編小説『荒魂』（新潮社、1964年）を取り上げ、主人公の出自を描いた文章に、柳田国男『山の人生』（郷土研究社、1926年）の紹介する江戸時代の鬼子誕生をめぐる民間説話が影響していることを明らかにした。『荒魂』の主人公は、作品を通じて常に巨大なエネルギーを発散し続けるが、そのエネルギーの解放の契機として、柳田民俗学の世界が巧みに取り込まれていたのである。第15章では、三島由紀夫晩年の連作長編『豊饒の海』の第1巻『春の雪』（新潮社、1969年）を取り上げ、この作品の鍵を握る「みやび（優雅）」の問題を中心に考察した。『春の雪』の主人公は、自分の身に着けた「優雅」が、学ばれたものであり、本物ではないのではという疑念を抱き、やが

てそのこだわりが物語を決定的に動かし、悲劇的結末を招き寄せることにもなるのだが、本論では、「王朝風の優雅」や「本物と偽物」の問題が、作者三島自身が生涯にわたってこだわり続けた問題でもあったことを、他作品（小説とエッセイ）における三島の発言や伝記的事実を通じて明らかにした。

以上が論文集の概要である。

15編の論文を概観して知られるのは、研究歴の前半においては、作品の内部に沈潜して分析的読解に取り組む論文が多いが、近年の論文では、歴史学や考古学など、文学研究の外部の研究成果も援用しながら、物語をより広い視野に位置付けようとする姿勢が目につく点である。物語研究と並行して日記研究を続けて来たことが、そうした変化と無縁でないことは確かだが、その変化が、文学的想像力の問題に対する興味から、「客観的事実」の探求へと関心が移行したことを意味しているのかと言えば、事はそれほど単純ではない。私の研究スタイルの変化には、きっかけとなった出来事があるが、それは、1997年秋にミシガン大学で開催されたMAJLSの学会に参加したことである。その国際会議のテーマが「ニューヒストリシズムと日本文学研究」だったことが、歴史と文学の関係について考えを深める契機となったのである。「ニューヒストリシズム」とは、「客観的真実」にこだわる旧来の歴史学に対して、歴史とは歴史「解釈」の問題であるという立場から異議申し立てを行った「新歴史主義」のことである。「日記文学」という、その定義をめぐって「記録か文学か」という議論の絶えない両義的作品を研究対象とする筆者が、「ニューヒストリシズムと日本文学研究」という総合テーマを掲げる国際会議に参加したのは、今にして思えば意味深い偶然だった。史料と文学作品を截然と区別する旧来の歴史学に対して、ニューヒストリシズムにおいては、文学的想像力の産物である文学作品も、それ自体が歴史の構成要素の一つと捉えられるのである。

たとえば、第2章では、『うつほ物語』にラピスラズリとしての「瑠璃」が頻出するという事実に着目して論を立てたが、歴史的事実として指摘できることは、平安時代の日本にラピスラズリが存在したこと（正倉院や興福寺の収蔵品によって証明できる）、そして、その分量が限られていたことである。したがって、客観的事実を明らかにすることを歴史研究の目的とする立場に立てば、作中に大量の瑠璃が登場する『うつほ物語』は、歴史的事実に反する荒唐無稽な作品として切り捨てられることになるだろう。この論考がそうした結論を目指していないことは繰り返すまでもなからう。『うつほ物語』が、史実に反する設定や現実には有り得ない設定を内包しているのは明らかだが、それはそれとして、遣唐使の廃止から100年も後の時代に、おそらくは一度も日本列島を離れたことのない人物が、地球的規模と言ってよい広大な視野の下、『うつほ物語』を書き上げたのも、紛れもない歴史的事実である。この物語の作者は、なぜ、またどのように、そうした想像力の展開を試みたのかと問うことは、探求に値する問題であり、史実離れ

を見咎め、この物語を根拠のない妄言と決めつけて事足りりとするよりも、文学史の実相に迫ることができるのではないか。

以上のようなことを考えながら『うつほ物語』研究に取り組んだわけだが、この物語の研究過程を通じて、研究対象のスケールの大きさに合わせるように、論者の側も視野を広げることになったのである。『浜松中納言物語』の初期論文に顕著に認められるように、以前は専ら作品に沈潜する方法を意識していたが、『うつほ物語』に取り組んで以来、俯瞰的視座から物語のありようを広く見渡す書き方をするようになったのである。『遷移する物語』の読者は、この論文集を通じて物語の遷移するありようを具体的に目にすると同時に、物語を研究する側の方法やスタイルも、作品に応じ、時の流れとともに遷移することを知らるだろう。長い研究歴を背景に持つ論文集には、そのような副次的効果も認められるのである。

以上、最後は刊行予定の論文集を紹介する形となったが、この文章をもって、半世紀にわたる研究活動の「なかじきり」としたい。

(本学教授)

